
勇者軍VS魔王軍 ~攻防最前線の真実~

高坂桐乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者軍VS魔王軍 ～攻防最前線の真実～

【Zコード】

Z6377C

【作者名】

高坂桐乃

【あらすじ】

皆さん、突然ですが「正義は必ず勝つ」ということをご存知ですか?ご存知でしょ。では敵キャラがどんな仕打ちをうけているか皆さん知っていますか?皆さんは勇者たちの活躍にしか興味が無い。敵のことなど知らない。そう思っているでしょ。では、とある勇者達と魔王達を見ながらその真実を探つていきましょ。では、ごゆっくりとお楽しみください

プロローグ（前書き）

魔物視点の物語。グロイかもしません。勇者のイメージを崩しています。

15禁では無いといつ事にしました。実は15禁小説ではないので

プロローグ

皆さん、突然ですが「正義は必ず勝つ」ということを「存知ですか?」
ご存知でしょう。では敵キャラがどんな仕打ちをうながしているか皆さん
知っていますか?

皆さんは勇者たちの活躍にしか興味が無い。敵のことなど知らない。
そう思っているでしょう。では、とある勇者達と魔王達を見ながら
その真実を
探つてこれもします。では、「もくじ」とお楽しみください。

プロローグ（後書き）

実は実は、18禁小説にしたかったが。
15禁で我慢しよう。でも15歳未満も安心して読める小説です。

魔王の城……

ここは、魔王の城。薄暗く、汚く、かび臭い、そんな城の外壁も内部に劣らず汚かつた。一部の外壁は崩れていた。

そんな城の中心部、王の間には、黒い布をかぶつたガキ・・・ではなく、お姉さんがいた（魔王に脅されて言い換えたらしい）

その部屋は、かなり広かつた。大きな窓には黒色のカーテン、今魔王の座つている玉座は

その部屋に付け足したものだつた。その玉座からは入り口に続く紅いじゅうたんが敷かれていた。その部屋の天井にあるシャンデリアはその部屋の大きさに劣らず大きかつた。だが、ロウソクに火は灯つておらず、

その部屋の光は、カーテンがかかっている窓から漏れるかすかな光のみだつた。

そして、そんな部屋の大きな出入口の扉は「……」
「……」この部屋に似合わず、普通の扉の一倍程度だつた。
そして、いきなりその『普通の扉の一倍程度』の扉が開いた。

「魔王様！古代遺跡と草原の間の小さな村で勇者団が誕生しました！」

血相を変えて飛び込んできたのは、魔物の中で魔王の次に強いといわれているガーゴイルだつた。

私が血相を変えて飛び込んできたというのに魔王様は

「あつそ」

と、流してしまった。

このガキが・・・・！私は心中でそう呟いたが、魔王様の前でそんなことを言つたら首が飛んでしまう。

「魔王様、これは一大事ですよ！最近あちこちで勇者団が結成されているのですよ！！」

「でも全て壊滅した。全ての拠点は守られています」

私が必死に言つているというのに・・・・

この歓楽主義者め・・・・！今は抑えておこう。

「魔王様、今の状況をご存知ですか？」

草原所属部隊は壊滅状態、古代遺跡所属部隊は白蛇の数が激減、300匹がたつたの50匹になってしまいましたし、蜂の巣駐屯部隊は戦闘能力が不十分、山間の村で敵軍は補充ができます」

私が早口でそこまでしゃべり、続けようとすると魔王様が話を止めた。

「心配性だね～～ガーグ。古代遺跡には、ラピスへ補充部隊として向かっている

ガーゴイル一ひ・・・・いや、一人を古代遺跡に向かわせてくれ

魔王様はガーゴイルを一匹と言いそうになつた。

無理もない、人間達は魔物を動物のように呼んでいるのだ。

差別だ、魔物にも権利はあるはずだ！

「しかしな～～、何故魔物は差別されるのだ、私は世界を平和にするために世界を征服するのだ。断じて私利私欲のためではないのだが・・・・」

「確か魔王様は、戦乱の世を終わらせるために戦つて、
ヨツヤヘリの国を平和にしたのですよね？」

魔王軍が結成される前は、この国のおかげで内乱がおきていた。
国土も、外国に取られて昔の60%になつた。

ここからは魔王様の長い愚痴に入る。読み飛ばしてもらいたい……

「我々は内乱をおこした者達しか殺していないのだぞ！勇者団も全て気絶させて逃がしているのだぞ！何故差別させるのだ！正義のために戦つていてなにが悪い！王の座も前国王から正式に受け継いだのだぞ！それが何だ！前に取られた国土も半分は取り返したのだぞ！それなのに人間達は私を殺して王の座を奪おうとしているのだぞ！私達が魔物だと言う理由から！建前はそうだが、本音は私を殺して王の座を奪い取ることだ！これまで魔王軍はこの国内の市民のを殺したか！何故か殺したということになつていて！濡れ衣だ！」

魔王様はそこまでしゃべると、いつたん水を飲み「ふう」と、溜息をついた。

「ガーグ、その他の戦力増強は君に任せる。

特にラピスとコロシアムを落とされたらかなりの痛手になる

魔王様はそう言つと、部屋を出て行つた。

多分『闇ちゃんのお部屋』に行つたのだらう。

・・・・・考ふると吹き出してしまつた。魔王様に見られていたら即死刑だつた。

私は、伝達スライムのところへ行つた。

伝達スライムとは、情報を伝達するスライムのことだ。スライムベスもいる。

伝達スライムは、修行をして超能力が使えるよつになつたとか。うそ臭いが。

「嘘じや無いですよ、ガーブ様。今日はどんな伝令ですか？」

「いきなり伝達スライムが話しかけてきた。

まあ、超能力は嘘じやないと思っておこづ。

私はしばらく考えた。魔王様に他の戦力増強を私に押し付けたのだから。

「じゃあ、ラピスへ向かっている双子のガーゴイルを古代遺跡へ。蜂の巣には、分裂スライムを一人送つてくれ。草原にはウイスプ10人と、分裂スライムを5匹を向かわせる。そして、山間の村を、

オグア隊で攻めてくれ。以上だ。」

私はそう言い終ると、立ち去りうとした。だが、伝達スライムに呼び止められた。

「えつと、ラピスとクロシアム、峡谷はどうします？」

私は少し考えると、

「オグア隊に第3戦力補充スライム隊を連れて行くよううつてくれ。スライム隊はクロシアムへ留まらせてくれ。

ラピスへは、第6戦力補充火山隊に行つてもらう」

伝達スライムは、了解、と言つて部屋に入つていった。

・・・・何をしているのか気になる・・・・・

だが、そんな心を抑えて私は王の間へ戻つた。

* * *

「ほにゃほにゃ～～～ほにゃほにゃ～～～

そここの画面の前のアナタ！初めてまして、伝令スライムのスラリーフす。

今超能力を使って伝令を伝えているところだけ、応答がねえつす。

尾語に『つす』をつけるなつすか？ダメつす。これだけは譲れねえ
つす。

・・・・ガーゴイルの兄弟め・・・・・！何処かで道草を食つて
るつすな！

ガーゴイルの兄弟

そのころガーゴイルの兄弟、ガーレフト&ガーライトは……

「つむ、草もなかなか食いな、弟よ」

「つむ、確かに食いな兄よ」

最初にしゃべったのが兄のガーライト、その後がガーレフトらしい。二人は、海峡からラピスへ続く道の脇に生えている草を茹でて食べていた。

・・・・・文字どおり『道草を食つている』

そんな時、ガーライトの目がカツー！と開いた。

「伝令が入ったようだ弟よ」

「じゃあ、聞いておいてくれ兄よ。俺は草を茹でておくぞ兄よ」
この兄弟、アホではないのか？というツッコミを入れないでもらいたい。

魔物にも個性はあるのだ！ by 閻ちゃん といつ格言もあるからな。

「ほにゃほにゃーーーほにゃほにゃーーー

この伝令方法はスラリーか弟よ。

俺はすぐに応答するぞ弟よ。

「こちらガーライトだ弟よ」

「どうも、スラリーです。あと、弟よつて入れないでもらえます？」

やはりスラリーか弟よ。しかし、それぐらい良いではないか弟よ。

「お前も つす と入れるのを我慢するのはつらいだろう弟よ。

それと同じなのだ弟よ

なるほど、確かに一理あるつす。

ちなみに田上の人には了解を得ない限り『つす』をいれないことにしているつす。

「じゃあ、私も入れるつす。伝令は、移動先をラピスから古代遺跡へ移動することつす」

「何故だ弟よ。ラピスを固めるとのことでラピスへ補充に向かっているのだぞ弟よ」

「ラメス村で勇者団が結成されたらしいつす。早めに潰したいらしいつす。ガーグ様がそういうつてたつす」

納得したぞ弟よ。だが実際、熱いところが好きなのだ弟よ。だが命令なら仕方が無いな弟よ。

「わかつたぞ弟よ。たしかラメス村は、古代遺跡～草原の間にあつたな弟よ」

「そうつす。他にも伝令があるのでもう通信を切斷するつす
「わかつたぞ弟よ」

そこまで話し終わるとスラリーは、「ほにゅやほにゅへへへほにゅやほにゅ～～～」と、通信を切断した。

最近は物騒だな弟よ。少なくとも緊急配属先変更は最近無かつたのだ弟よ。

俺は、弟にそのことを告げると、草を食つてから古代遺跡に向かつたのだ弟よ。

勇者団御一行……

一方こちらは勇者団御一行……

「あ～～あ、もう歩くの疲れた～～～」

そう叫んでいるのはこの勇者団唯一の魔法が使える赤髪のマゼンダだつた。

村では木を100本ぐらいと家を3軒を消滅させたらしい。年齢は秘密らしいが15～19歳前後。性格は大雑把、面倒なことが嫌いで、わがまま。

「若いのにそんなことを言つていると、歳をとつてからもつと大変になるぞ～～」

「お前も十分若いだろ！～」

年寄りくさくて、鎧を着ているあの青年、ジルバは村で兵士をしていたらしい。

年齢は22歳。一般的には青年と呼ばれなければならないのだ。多分精神年齢は80歳ぐらいなのである。

そしてツツコミを入れていた青髪で簡単な鎧を着ている、

弓矢を装備しているこの少年はブルース。この勇者団最年少の14歳。

弓矢の腕は村一番で、100メートル先の蟻も射貫けるとか。視力は測定不能なぐらい良い。だが性格はまだ子供。

「じゃあ、ここら邊でお昼にしましょうか？」

笑顔でマゼンダに話しかけるウェーブのかかった金髪の少女はテミ。その笑顔の裏には何かが潜んでいるという。(by ブルース) 村では誰にでも優しかった。だが、かなりの腹黒らしい。

人をだますのが得意で、多分今もつているお皿といつのも多分・・・

・・（喉元に短剣をつきつけられた）

16歳。ちなみに回復役で、牧師の娘らしい。

「・・・・もつ少し我慢しろ、今日中に古代遺跡に着かねばならない」

このふつきりぼうな顔をした後ろで髪を束ねている金髪で、マントを風になびかせているこの青年、プロントはこの勇者団のリーダー。

年齢は20歳。冷静沈着で、決して『ー』を使わないらしい。

作戦を立てるのが得意で、剣の腕もなかなからしい。

超能力は使えないが、伝令に使う超能力を捕らえて解読できるとか。ちなみに魔物ならこの能力は必ず備わってるらしい。

と、いうことは・・・・（テミに突きつけられた短剣が少し肌に食い込んだ）

「何でよーーー！－良いじゃない別に－！」

「ワシだって疲れたんだ、別にいいでは無いかーーー！」

マゼンダとジルバの講義を受けて、ブロントはこう言い放った。

「黙れ。後で話す。今は古代遺跡へ向かうのがさきだ」
かなり威厳があつた。それを聞いた二人は渋々歩き出した。

古代遺跡（前書き）

物語は深くなるよかったです。

歩き始めて15分後、『古代遺跡へ 後500m』という看板が見えた。

そこにマゼンダは座り込んだ。

「どうしたマゼンダ、若いのにもうへばつたのか？」

ジルバの問いに対しマゼンダはジルバをキツッと睨んだ後プロントの方を向いてぶっきらぼうに言った。

「そろそろ聞かせてくれる？古代遺跡へ行くのを急ぐ理由を

プロントはじょうがないという顔をしてため息をつくと話し始めた。

「さっき魔王軍の伝令を捕らえた。古代遺跡にガーゴイルが一体来るらしい。

多分普通のガーゴイルよりかなり劣っているだろ。

だが、今の我らには十分不利になる。そういう前に古代遺跡を

制圧して、ガーゴイルを迎撃討つのだ。わかつたらさっそく歩け！」

プロントはさう言ひ放ち、マントを風になびかせてさっそく歩いていった。

ブルースとテミも歩き始め、自称年寄りのジルバもゆっくりと・・・

ではなく

普通に歩いていった。どうやら肉体年齢は青年のようだ。

マゼンダは文句を言いながら歩々と歩き始めた・・・・・・

妖精のみでは他の種族には勝てない。

そして魔物だけでは心細いのだ。何より回復要員がないので妖精にやつてもらっているということだ。

だが、魔物は妖精を攻撃しないのは何故か？

答えは簡単。だが、別に答えは『簡単』だということではない。

妖精族が滅びる、又は古代遺跡からいなくなると

古代遺跡は崩壊し、妖精を滅ぼした種族は立ち入ることができないなくなる。

そんな場所に声が飛んだ。

「ゴーン様、勇者団が来ました！」

この声の主は白蛇隊の隊長のスネスだ。

そして私はゴーン。この古代遺跡駐屯軍の部隊長だ。

「」苦労。よし、すぐに第3種戦闘配置につくよう司令をかけて
もらいたい

* * *

その時後ろからフワツとした光が近づいてきた。
私は反射的に後ろを向いた。

そこにいた者とは・・・・

「また人間かあ？全く物騒な世の中になつてきたな・・・・」

「あ、ティンク様でしたか。」

「ああ、そうそう。妖精達は皆第三種戦闘配置に着かせたぞ」

この妖精はティンク様、妖精族の長だ。

妖精族・・・・・大体人間の顔程度の身長で四枚の透き通った羽根
があり

薄い緑色の髪が特徴だ・・・・・

「いつもいつもすみません・・・・・」

私は軽く頭を下げた。ティンク様は フツ つと笑い

「我々もここを守らねばならん。それにアイツはここに出身だから
なあ、手伝うのは当然だ」

と軽く言ってから近くの岩に座つた。

そう言えば確か魔王様は妖精族だと言つていたが・・・・

時は今から50年前・・・・・

妖精族、エルフ族、精靈族の過去

「回想シーンが始まる前にティインク様に忠告をせねば……
「ティインク様、ゲームでは岩の上に移動することはできないのです
が……」

「良いではないか、飛ぶのが疲れたのだ」

五十年前、ここ古代遺跡には妖精族の他にも精霊族やエルフ族が住んでいた。

この地は平和そのものだつた。

だが、五十年前のあの日・・・・・人間族が襲ってきたのだ・・・・・

・・・人間たちは荒れ狂い、手当たり次第に我らの仲間を斬つて
いつた・・・・

ある者は石陰に、またある者は木の陰に・・・・

妖精族はこうすることしか出来なかつた。元々魔力が高かつたのだが
まともに遣り合えば全滅する、我はそう判断して指示したのだつた。

エルフ族は勝てないと判断し、古代遺跡から逃亡。だが人間族の追
撃を喰らい

数が激減したらしい。当時の30%の50人に・・・

そして今はジャングルで暮らしているらしい。

だが、精霊族は違つた。

元々精霊族は書が無くても魔法を使えた。炎の精なら炎を、
大地の精なら大地を操ることができ、気のせい・・・ではなく
木の精は木を操る・・・その力は強大だつた。

だが、精霊族の数は他の種族に比べてかなり少ない。
その時はたつたの10人しか居なかつたのだ。

対して人間族は300、勝てるはずはなかつた。

古代遺跡に居た精霊族は、光の精・木の精霊・風の精・水の精霊・
火の精・命の精霊・雷の精霊・音の精そして・・・闇の精。
ちなみに、精霊と精の違いは強さの違いらしい。詳しいことは知ら
ないが・・・

精霊族は強いが、脆いのだ。精霊族は本体・・・丁度野球ボー
ル程度の

大きさの球体があり、その周りを魔力で体を作り出している・・・

実際は幻影に近いのだが。

その幻影は何度か斬りつけるだけで消滅する。消滅した後に残る本体は無力、抵抗する力は皆無だ。出来ることといえば逃げるか隠れるのみ。幻影の生成には早くて一時間はかかるのだ……

人間族との戦いがどうだったかは隠れていたので知らない。

だが戦いが相当激しかったのは聞こえてくる絶叫の声、雷鳴や時々辺りが明るくなり人間族の悲鳴が聞こえる、その事で大体はわかるのだ……

その後、地を揺らし木をへし折るがごとくの爆音に近い音が辺りを包み込んだ。

…………しばし沈黙の後、私は隠れていた場所から戦いがあつた所と見た。

そこには人間の原型を辛うじて残している屍骸、所々焼けており深い穴が開いている地面、

崩壊している遺跡の一部、そして……

息を切らしながら辛うじて立っている闇の精が目に映つた……

・

「闇い！」

私は思わずそう叫んだ。ちなみに 闇 とは闇の精の略だ。
私は回復の杖を持ち出し闇の側に行き、杖を振った。
杖は眩い光の粒を放ち、その粒は闇に降りかかった。

その後、闇は回復した。あの戦いから一ヶ月後の事だが。
その後、北にある魔物の住む城へ向かった。魔物を引き連れ
人間を滅ぼすため・・・では無かつた。二度と争いの無い
世界を作るために・・・

「そうだったのですか・・・」

ゴーンはそう呴くと北の方を向いた。

我也北の方を向き、呴いた。

「そうだったのだ・・・」

戦闘！

「ブルース、殺れ…………」

一方こちらは勇者団御一行様、古代遺跡に近い茂みに隠れています。ブルースはプロントの命令をはいはいと聞き入れて矢の先を紫色の液体に浸した。毒薬というやつだ。ブルースは何本かを毒薬に浸した後木の上に登りそこから矢を放つた。矢は宙を滑るように走りキラースネークを貫いた。蛇は数秒もがいた後息絶え、動かなくなつた。尤もキラースネーク相手に毒薬など不要なのだがプロントは念のためだ・・・・・と言つている。

敵襲に気がついた愚かな蛇達は獲物を仕留めようと木に向かつて進軍してきた。

遠くの敵はブルースによつて射抜かれ数が減る、例え木の下に来る事が出来てもプロント達によつて無残な姿になる。

ちなみに防御力が低い妖精族は前線に出るといつことは無いのだ。自分達が一番大事だと言つことだらう・・・・・

* * *

「我こそはスネイルなり〜〜！」

その言葉を言い終わらない内にスネイルとかいう可哀想なキラースネークはブルースに撃ち抜かれた。しかし、その後ろからはスネールだとかスネールだとかスネタとかスネルが 全部キラースネークだが 次から 次から

次へとプロント達の方へ突進してくる・・・・名前を言つてから攻

撃するより

無言のまま攻撃した方が良いという事が解らないのか？

辺り一面白と紅に染まったとき、ようやくキラースネークにも知恵が付いたようだ。

「皆！突進したらだめなのさ！…遺跡の守りを固めるのさ！…」
・・・それが普通だと思つが そんな言葉がブロントの脳裏を過ぎつた
かもしれない。

古代遺跡の北入り口付近 ちなみに古代遺跡には東西南北に各
一か所ずつ

入り口があります、とはテミ談だ は、かなりの数のキラース
ネークで覆われた。

「・・・・・すでに三百匹は死んでいるのにまだあんなに居やがる…
・・・ツ！…」

「しかも入り口が完全に封鎖されてる…・・・しかも外壁の上の通
路は

キラースネークがうよびよ居るし・・・・・どつするのよブロント～

そう言いながらもブルースとマゼンダは遠距離から炎と矢の雨嵐を
降らせている。

だが、ブルースの「筒は既に空になりかかっているし、マゼンダは
炎の書の呪文を

読み上げるのに舌をかみながらだし・・・・・だが、一向にキラー
スネークの数は減らない。

頻繁にキラースネークが光っているので、多分妖精が回復している
のだろう。

だが、他の者はうかつには近づけない。何しろ炎と矢の雨嵐だし、キラースネークが飛びかかる可能性も……。

「マゼンダ、壁を魔法でぶち抜け

「無理よ。だつて上級魔法は呪文が長いから絶対に舌かむからブロントが言葉を言い終わつてから0・1秒も時間がたつたは解らないが、

それぐらい早くにマゼンダが即答と速答した。

ちなみに、呪文は途切れたら最初からやり直しなのである。

「……。そんなに早く言葉を発することが出来るのになか?」

「……。あ。ホントだ。でも呪文は苦手なのよ。……。情けない。……。とブロントは呴いたとか

呴いていないとか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6377c/>

勇者軍VS魔王軍 ~攻防最前線の真実~

2011年7月24日19時56分発行